

安達ヶ原の鬼婆

二本松市

ずっと昔、阿武隈川のほとりに広がる安達ヶ原は、一面芒すすきに覆われた寂しい所でした。そこに松や杉の茂る丘があり、麓の岩屋に「いわて」という名のお婆おばが住んでおりました。

いわては、かつて京の都の身分の高いお姫様の乳母うはでしたが、そのお姫様は生まれつき話をする事ができない、言葉に障害のある人だったので。いろいろ手を尽くしても治りません。しかしそんな時、

「母親のお腹なかにいる赤子の生き肝ぎもを食べると治るのだ。」

と、ある占師うらなひしが予言したのです。いわてはそれを聞き、お姫様のためならばと、生き肝を求めてはるか陸奥むつへとやって来たのでした。

しかし赤子の生き肝など、おいそれと手に入るわけはなく、いたずらに過ぎ去る年月――。

そんなある年の秋の夕暮れ、旅姿の若い夫婦が、岩屋の前に姿を見せました。

「私は生駒助いこまのすけと申す旅の者ですが、妻が腹痛で難儀しております。どうか一夜泊めていただけないものでしょうか。」

見ると若妻の腹はぶつくとふくらみ、今にも赤子が生まれそうな気配。とたん、ぎらりと光るお婆の目、待ち続けた時が来たのです。だが、高ぶる気持ちを抑えつつ、

「なま、むき苦しい所じゃが、どうぞどうぞ。」

と二人を岩屋に通しました。しかし落ち着く間もなく苦しみ出した若妻。

「ほれ、お前様は薬を求めに里へ行きなされ。」

こう言つて生駒助を使いに出したお婆は、手に持つ出刃でいきなり若